

【12月の気象】

冬型の気圧配置が強まり、季節風が強くなっていきます」とテレビなどで聞かれる時期となりました。「冬型の気圧配置」とは、大陸に高気圧があって日本の東海上から千島方面に発達した低気圧がある気圧配置を言います。また、日本付近から見てどの方向で気圧が高いか、低いかを表現した用語もあり、日本付近から見て西が高く東が低い気圧配置は、冬季に現れる典型的な気圧配置で「西高東低の気圧配置」とも呼ばれています。図1は、強い冬型の気圧配置の天気図です。一般的に、このような時には、全国的に北または北西の季節風が強く吹き、愛媛県では、関門海峡を吹き抜けてくるため、北西の風がさらに強くなります。また、日本海側では大雪となり、太平洋側では乾燥した晴れの天気となります。

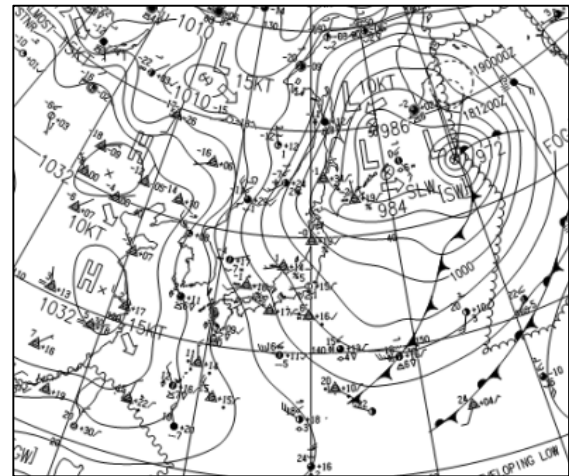


図1 2021年2月18日09時 地上天気図

【気象用語】「エルニーニョ/ラニーニャ現象」とは

エルニーニョ現象とは、太平洋赤道域の日付変更線付近から南米沿岸にかけて海面水温が平年より高くなり、その状態が1年程度続く現象です。逆に、同じ海域で海面水温が平年より低い状態が続く現象はラニーニャ現象と呼ばれ、それぞれ数年おきに発生します。エルニーニョ現象やラニーニャ現象は、日本を含め世界中の異常な天候の要因となり得ると考えられています。

図2は典型的なエルニーニョ現象及びラニーニャ現象が発生している時の太平洋における海面水温の平年偏差の分布を示しています（この図における平年値は1981～2010年の30年間の平均；赤が平年より高く、青が平年より低く、色が濃いほど平年偏差が大きいことを表します）。左の図は、1997/98エルニーニョ現象（1997年春に発生、1998年春に終息）が最盛期であった1997年11月における海面水温の平年偏差、右の図は1988/89ラニーニャ現象（1988年春に発生、1989年春に終息）が最盛期であった1988年12月における海面水温の平年偏差です。日付変更線（経度180度）の東から南米沿岸にかけての赤道沿いで、赤あるいは青の色が濃く、海面水温の平年偏差が大きくなっています。

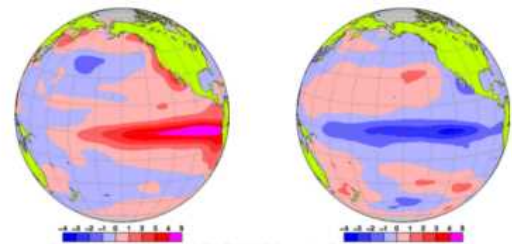


図2 1997年11月の月平均海面水温平年偏差（左）及び、1988年12月の月平均海面水温平年偏差（右）

エルニーニョやラニーニャが発生すると、日本の気候にも特徴が出てきます。たとえば、冬（12～2月）にラニーニャが発生している時の西日本では、平年と比べ気温が低い傾向があります。

11月10日に発表したエルニーニョ監視速報によると、現在、太平洋赤道域の海洋と大気の状態はラニーニャ現象時の特徴を示しており、ラニーニャ現象が発生しているとみられ、今後、冬の終わりまでラニーニャ現象が続く可能性の方がより高い（60%）と予測しています。

このため、この冬は寒気の影響を受けやすく、冬型の気圧配置となりやすいと予想しています。

気温が低くなったり、雪の降る日が多くなる可能性がありますので、今後の天気予報など日々の気象情報に留意してください。